

- |   |  |
|---|--|
| <p>18</p> <p>2) 前川, 鈴木: 分析化学, 14 (1965) 5, p. 424</p> <p>3) 高尾, 三好: 鉄と鋼, 47 (1961) 2, p. 53</p> <p>4) 大藤: 金属学会誌, 6 (1942) 8, p. 424</p> <p>5) 萩原, 檜木, 田中: 分光研究, 15 (1966) 1, p. 1</p> <p>6) P. HÖLLER : Spectrochimica Acta, 23 B (1967),</p> | <p>p. 1</p> <p>7) 山田, 檜原: 三菱製鋼技報, 4 (1970) 2, p. 116</p> <p>8) たとえば, G. GORDON, W. M. CADY: I. Opt. Soc. Am., 40 (1950), p. 852 など</p> <p>9) たとえば, 高橋, 吉野: 分光研究, 13 (1964) 2, p. 58 など</p> |
|---|--|

---

### 「分 析 研 究 者 へ の 提 言」

わが国鉄鋼技術の発展には、分析研究者・分析技術者のたゆまない研鑽と努力に負うところが大きく、この紙面をかりて関係各位に心から敬意を表します。

鉄鋼界も、量的拡大から質的向上への転換が要求されてきましたが、特に最近では企業の地域社会に対する責任を強く問われています。分析に携わっている方々は、このような時代に即応できるよう、発想なり姿勢の転換が必要だと考えます。

従来、分析研究者は業務の性格上とかく“縁の下の力持ち的存在”となり、自己の分野に埋没しがちであったことは否定できません。しかしこれからは、分析以外の分野にまで視野を広げ、分析法の開発から分析値の評価に至るまで、開発研究者と密接に連携し活動していただきたいと思います。企業ひいては社会に繁栄をもたらす公害防止策の推進、新製品の開発に、今日ほど分析研究者の力を必要とする時はありません。

技術的には、微量成分に対する精度、確度の向上、省力のための分析の機器化、自動化に積極的に取り組んでいただきたいものです。

—川崎製鉄(株)常務取締役技術研究所長 三本木貢治—

---